

まつおばしょう 松尾芭蕉と小松の俳人たち



小松市の多太神社に建てられた芭蕉の像

俳聖と呼ばれた松尾芭蕉が奥の細道の旅の途次小松に立ち寄ったことは同書にも書き残されており、小松の俳人たちの交流とその後小松の俳諧のみならず文芸史上大きな影響を与えた。

元禄二年（一六八九）三月二十七日、松尾芭蕉は江戸を立ち、全行程二四〇km、一五〇日間に及ぶ旅に立った。江戸から東北地方、北陸を巡り美濃



斎藤別当実盛をしのんだ「むざんやな…」の句を刻んだ多太神社の碑

大垣に至る旅が「奥の細道」の紀行文となった。

金沢へ入ったのが七月十五日、九泊して北枝の先導で二十四日に小松に到着した。途中、「あかく」と日は難面

も秋の風」と句を詠んでいる。

一日目は近江屋に泊り、立松寺（龍昌寺）、多田（多太）八幡に詣で、山王宮（本折日吉神社の藤村伊豆、俳号鼓嶺宅）で二日目を過ごし、この伊豆宅で芭蕉



芭蕉一行が泊まるとされる建聖寺に立つ「しほらしき…」の句碑（小松市寺町）

芭蕉の旅と現在の小松

の「しほらしき名や小松吹萩すゝき」を詠んだ。次の日は歓生亭で雨中の句会をもって歓待されている。

四日目は諏訪神社(現、菟橋神社)の祭礼に詣で再び多太神社を訪れて「むさんやな甲の下のきりぎりす」の句を奉納している。

その日に山中温泉に着き八月四日ま

で滞在し、その間、北枝が芭蕉から添削を受けたり俳諧の大意と連句の約束などの聞き書きを留めた「山中問答」が生まれている。再び小松に向う途中、那谷寺に詣で「石山の石より白し秋の風」の一句を奉納。しかし、小松へ引き返さなければならぬ理由は何であつたのか空白の一日となっている。

小松の俳人塵生^{じんせい}あての芭蕉書簡では天神奉納発句のため、曾良^{そら}随行日記では生駒^{いこま}万子^{まんし}に会うためとなっている。万子は小松天満宮の別当で能順^{のうじゆん}の弟子であり、この日、万子の案内にて中世と近世の文芸を代表する能順と芭蕉の二人の劇的な出会いが実現したと伝えられている。

師に付き添って二



十五日の間、師のすべてを学ぼうと努めた北枝は、旅を急ぐ芭蕉を越前松岡の天竜寺まで送りそこで別れるが、この様子を芭蕉は奥の細道に「北枝というもの、かりそめに見送りで、この処までしたひ来る。(略)今既に別れに臨み『物書きて扇引きさく名残哉』」と壮絶な別れを書き留めた。(天西勉)